

もう一つの万葉集平仮名傍訓本

— 関西大学蔵の題詞の高い平仮名傍訓本 —

田 中 大 士

一 もうひとつの万葉集平仮名傍訓本

本稿筆者は、平成二八〜二九年の二年間、明日香の奈良県立万葉文化館の共同研究に参加した（「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集」研究代表 乾善彦氏）。その際の筆者の主たる担当は、万葉集平仮名傍訓本であった。この本は、江戸期に作成された万葉集写本で、同様の本が全国に複数存在しているが、従来、『校本万葉集』をはじめとする万葉集伝本研究では言及されて来なかった。調査した五本では、一見それぞれがそっくりな様相であったが、底本は、活字付訓本によるものと寛永版本によるものと二つのグループに分けられることが判明した（拙稿「新たな万葉集伝本群の発見―万葉集平仮名傍訓本―」『万葉集古代学研究年報』第一七号 平成三二年三月）。これらの

伝本群は、関西大学をはじめ、万葉文化館、国文学研究資料館などに所蔵されており、それぞれで調査を行った。関西大学での調査の際、一緒に調査していた乾善彦氏が、調査に先立って行われた撮影の折に、もうひとつ平仮名傍訓の本を見つけたと教えてくれた。万葉集の伝本で、平仮名傍訓の本はきわめて珍しく（片仮名傍訓本ならばさして珍しくはない）、その折に調査していた伝本群の他にさらに別種の平仮名傍訓の本があることは大きな驚きであった。そこで、万葉文化館の共同研究と平行して、こちらの平仮名傍訓本の調査も行うことになった。その結果、共同研究で対象となった平仮名傍訓本群は、江戸時代の万葉集流布を知る上で重要な資料であることが明らかになったが、一方、当該の平仮名傍訓本も、それに勝るとも劣らぬ重要な資料であることが判明した。本稿では、この貴重なもう一

つの平仮名傍訓本を紹介し、簡単ながら万葉集の伝本史の中で
の位置づけを行うことを目的とする。

二 仙覚校訂本大天本系統

関西大学図書館蔵 万葉集 (G911.211.2-1-20)

装幀 列帖装

寸法 縦二三・五榿、横一六・五榿

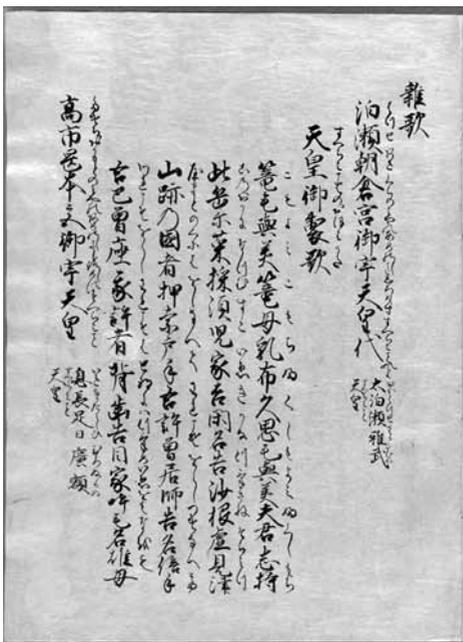
表紙 綾地表紙

書写推定年代 江戸初期

当該本は、平仮名傍訓という万葉集伝本としては珍しい付訓
形式である。万葉集の伝本は、平安時代の写本は平仮名訓で歌
本文の左に別行で訓が付される、いわゆる平仮名別提訓であつ
たが、鎌倉時代以降は、歌本文の右にルビのように片仮名で訓
が付される、片仮名傍訓が主流となり、仙覚校訂本が流布する
ようになると、その流れはさらに圧倒的になる（ただし、万葉
歌を抄出するなどの万葉集関係の歌書では歌を平仮名で記すも
のも存する）。江戸時代、万葉集の享受の主体となった寛永版
本も、仙覚校訂本を元としているため、片仮名傍訓の形式を取つ
ている。訓が平仮名で傍訓という形式は、鎌倉時代書写と言わ

れる断簡が二葉残るだけで、それ以外には、万葉文化館の共同
研究で対象となつた平仮名傍訓本群と当面の関西大学蔵の本が
あるばかりである。ところが、当面の本は、一連の平仮名傍訓
本群とは明確な違いがある。平仮名傍訓本群がいずれも題詞が
歌よりも低い形であるのに対して、当該の伝本は、題詞が歌よ
りも高く書かれている（以降、当該本を、平仮名傍訓本（題詞
高）と称する）。

万葉集平仮名傍訓本（題詞高・関西大学蔵）



大矢本系統は、巻七に顕著な特徴を持つ。それは、巻七の一部に錯簡を持つことである。これは、橋本進吉・武田祐吉両氏⁽³⁾によって明らかにされたことであるが、巻七の一部、旧国歌大観番号一一九四―一二〇七と一二〇八―一二二二との丁が逆になっているのである。⁽⁴⁾つまり、大矢本では、袋綴じの前後二丁ずつを交換すると、本来の正しい歌の並びに戻るのである。この特徴は、同じ寂印・成俊本系統の京大本系統には見られず、大矢本とその系統にのみ見られる。ところが、当該本には、巻七のこのような混乱が見られるのである。つまり、当該本は、大矢本系統の一本を底本としていることは確実であろう。次に仙覚文永本の系統を簡単に図示しておく。



三 大矢本系統の三つ子

大矢本には、特徴を同じくする伝本がある。『校本万葉集』(首

巻・万葉集諸本系統の研究)では、

以上の諸点を考慮してこゝに大矢本ともつとも近き性質を有する本として近衛本、金沢文庫本、図書寮一本、竹柏園一本等を数へることが出来る。

と述べられている。右の諸本が、いわゆる大矢本系統の本ということになる。ただし、このうち大矢本と近衛本(陽明文庫蔵)とは特に近い関係であると考えられる。『校本万葉集』新増補〔万葉集諸本並びに断簡類の解説〕昭和五年)では、大矢本と同じ系統の近衛本を校合に加える事について、近衛本が、大矢本にきわめて近い本であり、かつより伝本として優れた本であることが述べられている。その解説のうち、本稿が目にするのは、大矢本と近衛本がきわめて内容の似た本である点を述べる次の箇所である。

ただ両本が各面の行数を同じくするのみならず、各行の字数までも、稀に長歌や題詞・左注などの漢文で長きに及び改行を余儀なくされる場合において多少相違することはあるが、おおむね一致する。当然のことながら両本は各巻の

枚数、最後の丁の空白の行数まで同じである。

〔校本万葉集〕 新增補 〔万葉集諸本並びに断簡類の解説〕
昭和五五年)

ごく微細な違いを除き、両本はきわめて相似た写本と言うことが出来る。ところが、先に『校本万葉集』（首巻）が指摘する大矢本と同じ性格を持つとされる諸本の中に、この二本と相似た性格を持つ本がもう一つ存する。図書寮一本である（宮内庁書陵部蔵）。『校本万葉集』（首巻）によれば、この本は、二十卷中巻一、二、十四の三巻を欠く十七巻の本で、巻二十に寂印・成俊の奥書を持ち、巻七の錯簡も大矢本と同様である本とする（巻一の文永十年本の奥書は、巻一を欠くため、確認できない）。ならば、この本が大矢本の系統であることは確実にあるが、この本は、それ以上に大矢本と近接する特徴を持つ。

『校本万葉集』 新增補では、大矢本と近衛本との微細な違いの事例として、巻九の長歌一八〇九が大矢本が十六行なのに対して、近衛本が十五行で書いている点、また、巻十の長歌二〇八九を大矢本が八行で書いているのに対して、近衛本が七行で書いていると指摘する。さらに、大矢本は、近衛本には存する巻十の短歌一八六八、一八七〇、二三四七を欠いている点も

指摘する（但し、別紙貼り紙有り）。一覧すれば次のようになる。

① 巻九長歌一八〇九 近衛本 一五行

大矢本 一六行

② 巻十長歌二〇八九 近衛本 七行

大矢本 八行

③ 巻十短歌一八六八 近衛本 あり

大矢本 なし

一八七〇 近衛本 あり

大矢本 なし

二三四七 近衛本 あり

大矢本 なし

ところが、図書寮一本は、右の諸点について、多くの場合で大矢本と一致しているのである。すなわち、一八〇九は十六行、二〇八九は八行、短歌三首は一八六八、一八七〇は欠落（貼り紙で書入）、二三四七はありという結果である。二三四七が存するという点、完全に一致しているわけではないが、近衛本と

比べても図書寮一本と大矢本とはたいへん近い内容といえる。先述のように、大矢本と近衛本とは、全体としてきわめて内容の近い本である。『校本万葉集』新増補では、両本の筆跡が類似している点にまで言及している（但し、両者が親子関係でない点も指摘している）。その両本の間に図書寮一本を置いて見たとき、この本が、近衛本よりさらに大矢本に近い関係であることは注目に値しよう。『校本万葉集』新増補によれば、大矢本と近衛本は、いわば双子の関係とも言えるが、実は、図書寮一本も加えたいわば、三つ子の関係であったのである。先の『校本万葉集』（首巻）で指摘があった他の大矢本と近いとされる伝本は、金沢文庫本は、題詞が歌よりも低いという特徴を持つ。また、竹柏園一本は、一面七行書き（大矢本などはいずれも八行）である。いずれも、件の三本に比べると、内容が隔たっている。件の三本が特質する程近似していることは確実であろう。

四 図書寮一本と平仮名傍訓本（題詞高）

図書寮一本と大矢本との密接な関係はまだある。『校本万葉集』（首巻）で、大矢本は、書本（書写の際の底本）の姿を忠実に写そうとしている由の指摘がある。

この本は行数字数など書本によつたとおぼしく、わりあひによく書本の面目を伝えてみると見るべき点がある。たとへば巻四、五にて、行の終りに書いた字を消して更に次行の上はその字を書き、或は反対に行の最初の字を消して前行の下にその字を書いたもの数個あり、その中には書き加へたる字の傍に小さく「本」と書いてこれ書本の体裁なることを示したものがあつた。

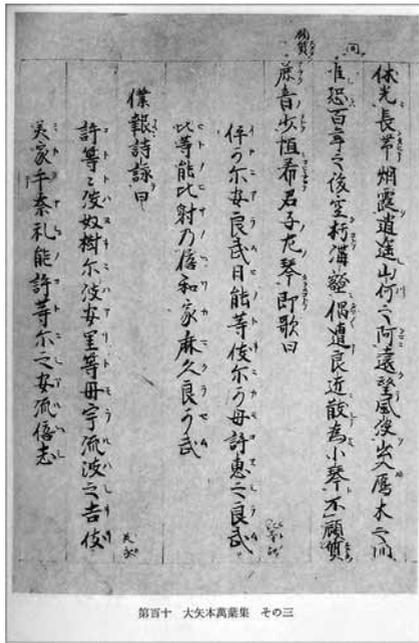
この点について、同書「諸本輯影」（昭和七年）の第百十「大矢本万葉集 その三」において、巻五、八一〇〜八一一の画像を載せている（次頁）。そして、その解説で、

前図と同じ本の巻第五の一部である。第一行の下端の「間」を消して、第二行の上にこれを書いたのは、書本と字詰を等しくさせようとの目的に出たので、なほ第二行と第三行、第四行と第五行、第七行と第八行にも同様の用意が看取される。

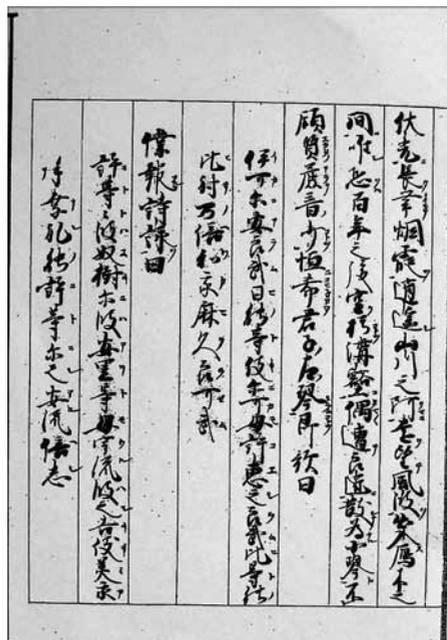
としている。この解説に依れば、大矢本では、書本が、第二行

は「間」で、第三行は「顔質」で始まっており、第四行は「比等能」で、第七行は「美家」で終わっていたことを忠実に再現しようとしていたということになる。ところが、下の画像は、図書寮一本の同じ部分である。

大矢本



図書寮一本

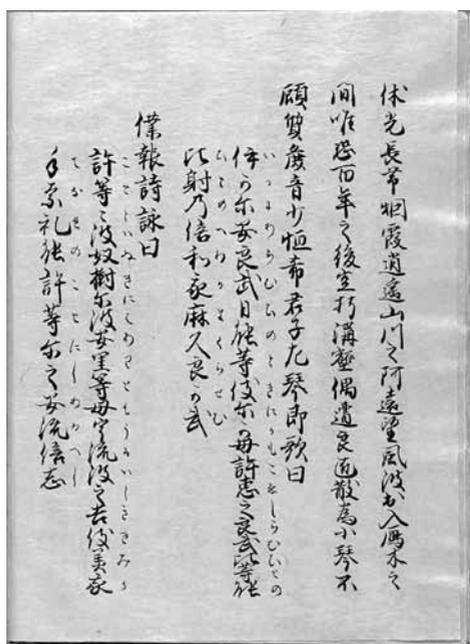


当然ながら、同じような行配置、字詰めであるが、注目すべきは、先に指摘したそれぞれの行のはじめと終わりの部分である。いずれも、大矢本が注記で指定した字詰めと同じ形になっていることが判る。これは、図書寮一本が、必ずしも大矢本の書本の姿を反映しているとは言い切れないものの（大矢本の指定を反映させて写している可能性も否定できない故）、図書寮一本が大矢本と密接な関係にあることを強く示唆するのであ

ろう。一方、近接関係にあるとされる近衛本には、これほどの似た関係は見られない。『校本万葉集』（首巻）の指摘通り、大矢本巻四、五には、このような注記が二一箇所ほど見られるが（一行分を一箇所として計算して）、いずれの場合も、図書寮一本は、大矢本の指定の字詰めと合致している。一方、近衛本では、九ヶ所一致している。この数字は、見方によっては、近衛本も半数は一致していると解釈できる。しかし、先述の通り、近衛本は、全体として大矢本と酷似した内容を持つている。したがって、このあたりの字詰めも偶然に一致する可能性が高い。それゆえ、そのような一致も半数に届いていないと考えるべき所であろう。それに比して、大矢本の指定と図書寮一本とがすべて一致することは、先ほど指摘した長歌の行数以上に、大矢本と図書寮一本との密接な関係を示す証左とすることが出来るよう。

この二本の近接関係は、ある意味驚くべき程の近さであるが、さらに驚くのは、本稿で話題にしている平仮名傍訓本（題詞高）が、今の部分、すべて図書寮一本と合致する点である。次に挙げるのは、先に掲げた大矢本、図書寮一本と同じ部分である。

関西大学蔵平仮名傍訓本（題詞高）



備報詩詠曰

休光長草烟霞道遙山川之河遠望風波か入馬水
 向唯恐百年之後空朽溝壑偶逢良辰散為小琴不
 願賀慶音少恒希君子几琴師秋曰

い、より、り、じ、ら、の、さ、は、い、し、こ、を、し、う、ひ、て、の
 仔、の、尔、安、良、武、日、能、等、伎、尔、母、許、忠、之、武、等、能、
 以、射、乃、信、和、衣、麻、久、良、の、武、

許、等、に、波、奴、樹、の、波、安、良、等、母、字、流、没、く、去、後、妻、家、
 系、礼、能、許、等、尔、く、安、流、信、志、

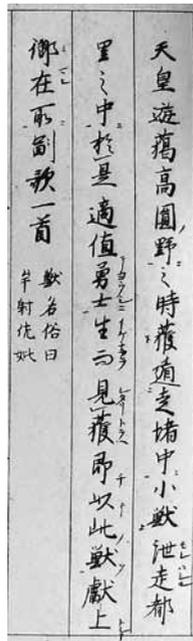
大矢本で字詰めが指定された四箇所すべてが図書寮一本と同様であることが判る。平仮名傍訓本（題詞高）は、大矢本で見られる二一箇所の注記について、すべて図書寮一本は同じ字詰めになっている。

では、『校本万葉集』新增補で指摘された巻九の長歌の行数や歌の欠落はどうか。これらもすべて大矢本と同じ形になっている。つまり、図書寮一本では存していた二三四七を含めて、

大矢本と同じ内容になっている。

一方で、大矢本の三つ子の本と平仮名傍訓本（題詞高）との複雑な関係をもう一つ述べておく必要がある。『校本万葉集』新增補では、大矢本と近衛本との関係について、巻六、一〇二八の題詞を取り上げている。近衛本の当該部分は、同書「諸本輯影第四十八」に画像がある（題詞部分のみ引用）。

近衛本



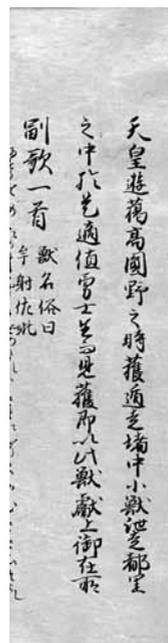
これは、同書の解説に依れば、

十一年己卯 天皇遊獵高圓野之時☆小獸泄走都里之中 於是適值勇士生而見獲即以此獸獻上御在所副歌一首歌名俗曰 平射虎妣 という部分の☆に京大本代繕書き入れ特有の「獲遁走堵中」という句が混入したものである。ところが、大矢本は、この部分

は書かれておらず、別紙貼り紙で書かれているとする。

では、図書寮一本はというと、やはりこの本文はなく、京大本代繕書き入れによるとおぼしき書人が存する。それらに対して、平仮名傍訓本（題詞高）は次のようになっている。

関西大学蔵平仮名傍訓本



本文中に「獲遁走堵中」が入り込んでおり、三本の中では近衛本に近い。

以上、平仮名傍訓本（題詞高）は、大矢本系統の三つ子の伝本ときわめてよく似た本文を持つが、細部においてはいずれの本とも完全な一致はしていない。但し、大矢本系統の三本はきわめて近接した伝本群であり、たとえば、巻七の錯簡の共有などから考えても、平仮名傍訓本（題詞高）が、その他の系統を底本としていたことは考えがたい。いずれにしろ、大矢本系統三本、或いはそれに類似した未知の本の何れかの本を底本とし

ていることに間違いはなからう。

以下のことは、当面の平仮名傍訓本（題詞高）とは直接関係のないことながら、大矢本系統の三本が、ともに酷似した内容を持つことは注目に値する。現在このように酷似した本が三つ残っていると言うことは、さらに類似の伝本が作られていたことを示唆し、仙覚文永本の広がりを考える上で重要な視点になると考えられる。さらに、三本の内の二本、近衛本と図書寮一本とが、京大本代繕書き入れ（いわゆる禁裏御本）と同様の書き入れを有している点も重要と思われる。

五 仙覚校訂本との違い

仙覚校訂本は、単に諸本を校訂するだけでなく、本に様々な注記を加えている。このような注記は、第一次校訂本の寛元本から行われていたと考えられるが、現在寛元本の本来の姿が十分に判っていない。かつ、今回、平仮名傍訓本（題詞高）は第二次校訂本の文永本が元になっているので、文永本に基づいてその特徴について述べる。

まず、指摘できるのが、訓の色分けである。仙覚は、訓を三色に分けて付している。墨の訓は古点、次点の訓である。古点

と次点との区別については後述するが、基本的に墨の訓は、仙覚が見た諸本に訓があったものと言うことが出来る。そして、朱の訓は従来の諸本に訓がなく、仙覚が新たに訓を付したものである。いわゆる新点である。さらに、青い訓が存する。仙覚は、新点以外は、従来ある諸本の訓で良いものを採用するという基本方針を採っているが、部分的にいずれの訓にも満足できない場合は、仙覚が考案した訓を青で記した。これを紺青訓という。これらの色分けにより、由来の古い訓から仙覚の新たな訓まで、歌々の訓の歴史が明らかになる。訓の歴史という点では、古点と次点との区別が存する。古点は村上朝で初めて付された訓、次点はそれ以降に付された訓である。仙覚は、次点には、歌の肩などに朱の合点を付している。仙覚文永本では、このように、かなりきめ細かく付訓の歴史が一覧できるようになっている。

次には、短歌、旋頭歌、長歌などの歌体に対する配慮である。仙覚校訂本には、数が圧倒的に多い短歌以外の歌体には、歌の頭に朱などの星（黒丸）が付されている。これは、万葉集を読み進めて行くとき、短歌以外の歌体である旨注意を喚起する意図と考えられる。なお、長歌の場合は、句ごとに句切り符号が付されており、旋頭歌にも句切り符号が存する。

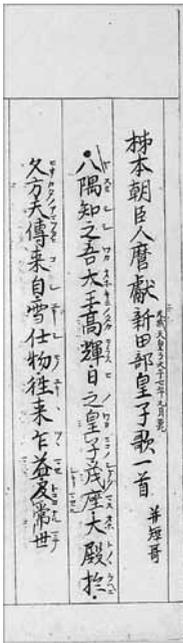
また、歌本文に朱で雁金点などが付されるという特徴もある。これは、万葉集の歌本文をいかに読み下しているかの指標として付されたものと考えられる。

題詞や左注で人名が出ている場合には、その人名に対しての解説が付される場合がある。あるいは、稀に題詞の用語について注記が付されることもある。いずれも朱記される。

以上、略述してきたが、仙覚校訂本は、単に諸本を校訂し、良い本文を提供すると言っただけではなく、万葉集を読むためのさまざまな工夫が凝らされている。これらは、一種の注釈とも言って良い要素である。

以上の点を、具体的に仙覚校訂本の伝本で見て行こう。次に示すのは、図書寮一本の巻三、二六一の長歌の歌と題詞である。

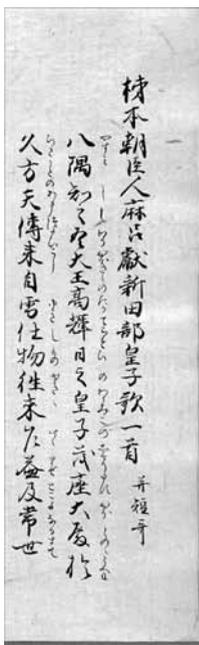
図書寮一本



第二行の冒頭「八隅知之」の肩に朱の合点があり、さらに、

句の頭に朱の「●」がある。これは、この歌が次点歌である印であり、また、長歌である印である。さらに、歌本文「八隅知之」と「吾大王」との間に朱の点「・」があり、この朱点は句ごとに付されている。これらは、長歌についての句切り符号である。また、第三行の最終句「及常世」の「及」と「常」との間に朱で雁金点が付されている。これは、この句を「トコヨナルマデ」と反って読むことを示している。それから、第一行の「新田部皇子」の右側に朱で書かれている「天武天皇子天平七年九月薨」は、新田部皇子についての説明である。これらは、いずれも仙覚文永本には必ず書かれる要素である。そして、次に示すのが、平仮名傍訓本（題詞高）の同じ部分である。

関西大学蔵平仮名傍訓本（題詞高）



このように、今説明した要素は一切見られない。もちろん、他の部分も同様である。また、この本には訓の色付けも一切見られず、新点、訂正訓などの違いは認められない。

平仮名傍訓本（題詞高）は、図書館一本などの大矢本系統の伝本ときわめて近い内容を持ちながらも、仙覚校訂本が持つ右のようなさまざまな特徴はほぼ切り捨てられている。その点で、当該本は、仙覚校訂本諸本とは一線を画した存在と言うことが出来る。その点で、仙覚校訂本を底本としながら、訓の色分けなどが失われた版本（活字付訓本・寛永版本）やそれらを底本とした平仮名傍訓本（題詞低）ときわめて似た状況の写本になっている。

〔注〕

(1) 鎌倉時代書写の平仮名傍訓切は、巻一の二葉が知られている。はじめ、『校本万葉集』新増補（昭和五十五年）の「系統のみならず名称も未定で、校合に加えなかつた」断簡として、天理大学附属天理図書館蔵の切（巻一、二七第五句～二八題詞）が記載された。のち、日比野浩信『万葉集』断簡三首」（『及古』第六〇号 平成二三年十二月）が、ツレである新出の切を紹介した（二六～二七第四句・日比野氏蔵）。

なお、日比野浩信『はじめての古筆切』（平成三二年）に、この切のカラー写真が収載されている。日比野氏の紹介した切は、平仮名傍訓で、かつ、長歌に訓を持つ。このような伝本の存在は、仙覚以前の伝本は、平仮名訓の本と片仮名訓の本とに別れ、後者は長歌に訓がある点が大きな特徴であるとする本稿筆者の主張と抵触する可能性がある。その点について、別稿を準備中である。

(2) 中国や我が国に残る万葉時代以前の古い漢籍には題と作品の高さが同じという例は見られるが、題が作品より高いという事例は見られない（拙稿「広瀬本万葉集の性格」『文学』（季刊）第六卷第三号 平成七年夏）。

(3) 仙覚校訂本大矢本系統巻七の錯簡については、武田祐吉「萬葉集巻七の錯簡に就いて」（『心の花』第二七卷第三号 大正十二年）がよく知られているが、石川武美記念図書館（旧名 お茶の水図書館）蔵の橋本進吉氏の手書き原稿「大矢本萬葉集解題」（大正七年七月）によれば、武田論文発表前に武田氏の主張と同じ内容が橋本進吉氏によって、すでに記されている由、先掲拙稿「新たな万葉集伝本群の発見―万葉集平仮名傍訓本―」ですでに述べた。

(4) このような混乱を受け継ぐ寛永版本が旧国歌大観の底本

となつてゐるために、旧国歌大観番号にもこの混乱が反映されてしまつてゐる。

(5) 図書寮一本(506・14)は、縦三〇・七糎×横二二・三糎の袋綴じの大型本。一面八行。罫界(縦二四・四糎×横一九・八糎)を持つてゐる。

(付記) 本稿執筆に当たり、万葉集平仮名傍訓本(題詞高)、平仮名傍訓本(題詞低)については関西大学図書館の、図書寮一本については宮内庁書陵部の、大矢本については石川武美記念図書館の、近衛本については陽明文庫の掲載許可をいただいた。なお、近衛本については、国文学研究資料館蔵の紙焼き写真を閲覧した。また、本稿は、日本学術振興会「JPSの科学研究補助金の助成(基盤研究(B))」万葉集仙覚校訂本の総合的研究」課題番号18H00646代表研究者田中大士)に基づく成果である。記して感謝申し上げます。

(たなか ひろし／日本女子大学教授)